

棚田学会通信

第10号 2003年6月25日
発行/棚田学会
〒184-8577
東京都小金井市本町6-5-3
(ふるさときやらばん内)
TEL:042-381-6721
FAX:042-383-8614



山口県油谷町東後畑の棚田

目次

表紙の写真・山口県油谷町東後畑の棚田

巻頭言

地球環境米米フォーラム in 北長門……………山口県油谷町長・藤田芳久… 1

各地の情報

鴨川市棚田農業特区構想……………鴨川市農林水産課・渡辺寿雄… 1

救世主としたい！ 東頸城農業特区……………新潟県東頸城郡浦川原村農林課・山崎 剛… 2

酒谷地区地域づくりの取り組み……………

やっちみろかい酒谷、酒谷グリーンツーリズム協議会会長・日高茂信… 3

兵庫県の「棚田交流人」活動について……………兵庫県農林水産部農林水産局農村環境課・奥田邦清… 4

官庁ニュース

「第3回世界水フォーラム」について……………農林水産省農村振興局土地改良企画課・馬場範雪… 6

日本の棚田百選紹介

日本一（自称）の棚田……………愛林館（熊本県水俣市）・沢畑 亨… 8

会員からのお便り・事務局からのお知らせ…………… 9

[巻頭言]

地球環境米米フォーラム in 北長門

田植えフェスティバルを終えて

山口県油谷町長 藤田 芳久

平成 15 年 6 月 1 日早朝、空を仰ぎほっと胸を撫で下ろす。前日、時ならぬ台風 4 号の通過による風雨の中、長門市に 48 カ国の大使・公使またその家族をゲストに迎え「地球環境米米フォーラム in 北長門フェスティバル」が開始した。ホストファミリーをはじめ大勢の関係者が一堂に会し、初対面セレモニーまた歓迎アトラクションで深い感動を味わった後、長門・萩市・三隅・日置・油谷町それぞれ分散した。

本州最西北端と言われている我が油谷町にも、ベネズエラ、ガーナなど 10 カ国のゲストを迎え、まず全体交流会で親交を深めた後、各ホームステイ先に迎え入れられた。家族だけでなく、ご近所挙げての歓迎懇親会が行われたお宅もあったと聞き、こういう形での国際交流ができたことは、とても意義深いと感じた。

当日は抜けるような青空と紺碧の海とはいかなかったが、ほどよい日差しは田植えには打ってつけであった。ホストファミリーに導かれたゲストたちが割り当ての田に入り、県内外からの大勢のボランティアたちと共に見様見真似での田植えが始まった。千人もの参加会場となった東後畑地区の棚田は日本海を一望する場所にあり、棚田百選に選定された見

事な景観を誇っている。水田には空の青さ雲の白さを写し、夜は田毎の月、数え切れぬほどの漁火がロマンを誘う。春夏秋冬四季折々の眺めに魅了され、全国からプロ・アマの写真家が訪れ、泊まりがけで三脚の場所取りをする。

油谷町の棚田は江戸時代に開墾され、用水確保のための溜め池と大小の水田が、技術の粋を尽くして一体的に造成されており、西日本一の枚数でもある。このすばらしい郷土の遺産も、時代の流れと共に徐々に荒廃して来ており、その保存に苦慮しているのは全国の棚田町村の例に同じである。

今では機械化されほとんどが使われることの無い田植え定規を使つての田植えは、泥田の感触と共に労働の大変さが実感され、参加者に過疎化・高齢化による後継者不足の悩みを理解していただけたかと思う。この 5 年間の棚田ボランティア事業、昨年からのオーナー制度事業をますます活発にし、稲作文化を通して地球環境保全への理解を深めていただくことで、まだまだ未来に希望をつなぐことができると信じている。

9 月 28 日には人々は再会を、またたわわに実った稲穂はハゼ掛けされるのを待ち望んでいるであろう。

[各地の情報]

鴨川市棚田農業特区構想

鴨川市農林水産課 渡辺 寿雄

千葉県鴨川市では、農業の振興と農村の活性化を図るため、平成 8 年度から地域住民との協働による地域おこし「鴨川市リフレッシュビレッジ事業」に取り組んでいます。

この事業は、都市住民の田舎暮らしや定年帰農などのニーズを受け入れ、その指導体制を確立することによって、交流人口の拡大と定住化を促進させよ

うとするもので、その拠点となる「みんなみの里」と「大山千枚田」は、田舎暮らしを志向する多くの来訪者で賑わっています。

特に、大山千枚田での棚田オーナー制度（特定農地貸付）には多くの応募があり、オーナーへの希望を叶えられない人が沢山います。

市の特区構想は、棚田の保全をこれまでの大山千

枚田における点から、市内全域への面的な拡大を図ると共に、都市住民が農業に参画出来る環境を整備し、更なる都市農村交流の進展及び過疎化や荒廃地の防止を図ろうとするものです。

なお、4月21日に構造改革特区の第1号として認定を受けた棚田農業特区では、特例措置「地方公共団体及び農業協同組合以外の者による特定農地貸付事業」の導入により、棚田オーナー制度の開設主体を個人農家にも拡大することが可能となりました。

よく取材や有識者の方から、なにも特区でなく大山千枚田と同じに市がやれば良いのではと聞かれますが、交流の担い手である農家（住民）自ら、利用申込の受付、利用料の徴収、営農指導等のプロデュースをすることにより、「都市住民のニーズに応じた多様な棚田オーナー制度」の展開が可能となり、都市農村交流の一層の深まりと拡大が見込まれますし、又今後もう一つの提案である都市住民の農地取得を考えた場合には、開設主体である農家とそれを支援する地域の集落がどうしても主体的に進めることが必要になってくるからです。

こうした提案ができるのも、鴨川サミットを契機に、直接支払制度を活用している集落の間から「我が集落においても、集落活性化のため都市住民の農作業体験を受け入れたい」との声が出はじめ、今年

3月、29集落が大同団結し、鴨川市中山間地域等活性化協議会が結成されたからこそであります。

来年度のオーナー数は、大山千枚田で136組のほか、特区による新たな5集落で50組、合計186組の受け入れが可能となります。

地域活性化のシンボルとしての大山千枚田では実現できなかったものが、小さな集落での取り組みだからこそ実現できる。今回の特区は、そんな楽しみもあります。

※鴨川市の構造改革特別区域計画は、首相官邸「構造改革特別区域推進本部」のホームページに掲載されています。



救世主としたい！

構造改革を実現する施策の一つであり、地域限定で規制緩和する構造改革特区について、4月21日に「東頸城農業特区」が、国から第1号認定を受けた。

この特区は、自治体のアイデアを基に規制緩和の効果を試す「構造改革の実験」ともいえる制度である。

東頸城農業特区は、①様々な法人が農業に参入できる②誰でも市民農園が開設できるという規制緩和を受けたものである。

この特区では、①新たな担い手確保による農地の遊休化防止と国土保全 ②地域の人材を活用した新

東頸城農業特区

新潟県東頸城郡浦川原村建設農林課 山崎 剛
 たな雇用の確保と新规定住の促進 ③地域の環境と資源を活用した新たな複合型産業の育成 ④体験交流型産業の育成・拡大を目標にしている。

つまり、農業の担い手確保と現在6町村で取り組んでいる越後田舎体験をさらに発展させ、地域経済を活性化させようというものである。現在、建設業2社が参入を予定し、準備に入っている。

A社は、取り組みの難しい有機無農薬米の生産を目指している。社会のニーズが高まっているのは、安全・安心である。そのため、そのニーズに答えたおいしい主食の提供を考えている。

平場地帯の水田では、周辺で農薬を散布されると、農薬を使わない田でも使った状態になる可能性が高い。

しかし、山間部の田は、生産性・作業性が低いものの、森林や地形で周辺の農地と隔離されているため、無農薬米生産に適している。そこにねらいをつけた取り組みである。

そのほかに、山菜の栽培や加工、岩魚（イワナ）の養殖も手がける。

B社は、小高い山の上に広がる観光ぶどう園を中心とした見晴らしのいいロケーションを活用し、観光農園とレストランを運営しようというものである。

ぶどうはワインに加工する。牧草地にはポニーを中心とした小動物を放牧する。また、畑地は市民農園の利用と、有機無農薬野菜の栽培を考えている。そのために、地域循環型の堆肥製造も計画している。

最終的には、1年のうち2ヶ月しか誘客のできていない所に、年間を通じ人を呼び込み、地元でとれ

た農産物をレストランで消費しようとの考えである。

今まで生産面、経済面からすると見向きもされなかった中山間地の農地が、新たな発想で光が当たる可能性がでてきた。

いくら棚田や農村景観がいいといっても、それだけの理由では守っていくことは現実としてできない。そのような大きなものは、ボランティアなどだけでは無理だからである。

この特区によって、山間地域の特性を生かした経済活動がより活性化できる道が開けた。企業のアイデアと行動力に頼ることになるが、農地を生かし、地域を守ることにつながる一つの手段として期待が高まる。

今後、どぶろくを製造し提供できる特区申請など、さらに農業や地域を生かす関連事業も計画している。しかし、国からは制度改革だけで、補助金などの支援はない。成功するには、町村も参入者もこれからの正念場である。

酒谷地区地域づくりの取り組み

やちみろかい酒谷 会長 日高 茂信
酒谷グリーンツーリズム協議会

はじめに

宮崎県日南市酒谷地区は、日南市の西端の中山間地域に位置し、人口約 1,400 人（世帯数は約 500）のうち約 3 割が高齢者の地区です。ここは、魅力的で個性的な自然資源や歴史的資源がたくさん残っています。この恵まれた自然や歴史資源が、自分たちの足もとにあるのに、それを知らず、ふるさとへの愛情や誇りが薄れてきているのではないかと考え、平成 6 年 2 月 22 日に「やちみろかい酒谷」を結成しました。

自由な発想と失敗をおそれない精神でいろいろなことにチャレンジしています。「誇りに思えいつまでも住みたい地域、心にふるさと」これが私たちの目的です。私たちの活動は、まさに地域資源を活用したもので、地域の者でさえ知らなかった魅力を地域住民と一体になって活動を展開しています。

活動の内容

①ふるさとの風景を活かして

酒谷川の支流に架けられている 1889 年生れのアーチ状の石橋「大谷石橋」は、長さ 22m、幅が 3.4m あります。以前は国道の一部として交通量も多かったが、1971 年の新国道開通とともに交通量が減り放置状態。雑草や木々で覆われ、地元の人たちさえ、その存在を忘れかけてしまっていました。私たちは、



この荒れ果てた知られざる名所をよみがえらせようと保存活動を始めました。平日の仕事の後や週末に清掃作業を行いました。橋なので届かない所もありクレーン車を借り、ぶら下がって作業をしました。今考えると怖い気もしますが、会員は橋を復活させることに熱くなっていたと思います。石橋は、平成 10 年に綺麗になり、脚光を浴び見事よみがえりました。毎年 8 月には、幻想的にライトアップした 18 世紀生まれの「大谷石橋」の前で「オカリナコンサート」を開催しています。酒谷の土で作ったオカリナや、地元の中学生も登場し、田園風景によく似合う柔らかい澄んだ音色が、訪れた者の心に優しい音を奏でてくれます。また、酒谷には昭和の初期に自然石を積んで造った「坂元の棚田」があります。毎年ここにレンゲソウの種をまき、レンゲ田を舞台に「棚田まつり」を開催します。獅子舞、神楽など伝統芸能が披露される中、多くの親子連れで賑わいます。「日本棚田百選」に選定された 70 枚の棚田はピラミッドを彷彿とさせます。



②酒谷グリーンツーリズム協議会の立ち上げ

このような活動を展開する中で、地域の活性化とは何か、と考えるようになりました。私なりに結論付けたのは、所得の向上ではないかと思うようになりました。そこで展開の舞台にしたのが坂元地区です。しかし、「やっちみろかい酒谷」の組織の中に組み込むことは避けました。それは、先に紹介したような活動で限界だからです。これ以上負担をかけると、組織そのものが継続できないからです。「やっちみろかい酒谷」は、今後も地区のPRとして地

区外に情報活動を基本的に展開し継続しなければならないと思っています。



そこで別組織として、「酒谷グリーンツーリズム協議会」を平成 12 年 3 月に立ち上げました。ここで最初に取り組んだのが棚田を守りつづけるための「棚田ボランティア制」です。「坂元の棚田」は、13 戸が 3.5 畝、70 枚の田を管理し、昔ながらのかけ干しで生産しています。この棚田も高齢化と後継者不足から棚田の耕作放棄がこれから確実に増えていく状況にあります。これを見越してのことでありましたが、もの見事に地区から断られました。私も地区に対しての説明も足りなかったのですが、それで諦めては、すべてが終わってしまうので、後輩が一人いましたので、事情を説明しそこを舞台に強引に実施しました。すると 20 名のボランティアさんが参加してくれました。もちろんボランティアですので、基本は手弁当で、もてなしはしないという条件です。それをさりげなく見ていた叔母ちゃんが「あんげなんとなら、うちも来年かい、たのもかい」とこっそり言ってきて、13 年度の稲作から正式にスタートできました。田植え、稲刈り、石垣の草取りを計画し、マスコミを広く活用しお願いしたところ、総勢 100 名の方々がボランティアで協力してくださいました。一年中ボランティアだけでは申し訳ないので、収穫祭として案内し、棚田で収穫した米でおにぎりを作ったり、餅米で臼を使い餅つきをしたり、酒谷でとれる食材で地元と参加者と一緒に料理をして一日もてなしました。参加者全員心から楽しんでいただきました。

この一年で「棚田オーナー制」に自信が持てるようになり、14年度からスタートしました。私が会員として希望したのは、ただ会費を出せばいいのではなく棚田を愛し一緒に耕作し守りつづけていく気持ちの強い方を望みました。しかも20組様で限定したのです。それは本物の「オーナー制度」を作りたかったからです。ややもすると、行政主導型になり先細りするのが見えるからです。地域づくりの活動は地元主導でないと長続きしません。そこには地元で事務局をしっかりとしなければなりません。そこで初年度で初体験ですから、オーナーさんに相談し、一年間私たちに勉強させて下さいと理解を求め展開してまいりました。もちろんボランティア制も平衡しての活動です。結果、課題が出てきました。いちばん困ったのが会費の不足でした。

しかし、一年間勉強させてくださいとお願いした

ので、素直にわびて会費の値上げをし、15年度の募集をしたところ、特別の事情がある方を除き全員継続をしていただき、安心したところです。ちなみに今年は30組に会員を増やしました。これも事務局がしっかりしてきたからです。

今後の展開

坂元地区の棚田を中心として「ボランティア制」「オーナー制度」のことを述べましたが、地域の活性化はなんといっても収入が得られることだと私は考えます。私自身もこの地区に空家を取得しました。今後これをどのように活用していくか、空き家からどのように収入が得られ、また、地区内の人々を導いていけばよいか、不安もありますが楽しみながら展開していきたいと思えます。

たなだ こうりゅうびと 兵庫県の「棚田交流人」活動について

兵庫県農林水産部農林水産局農村環境課 奥田 邦清

「耕して天に至る」とたとえられる棚田は先人が築いた貴重な文化遺産であり、「日本人のふるさとの原風景」とも言われる農山村の美しい風景を形づくるだけでなく、防災面や環境面でも大きな役割を担っています。しかしながら、農山村の過疎化や高齢化などにより、棚田を守っていくことが次第に困難となっています。

このため、兵庫県では、平成9年度から、県土の保全や水資源のかん養、さらには、農山村の景観の

形成といった公益的機能が強く、今後とも保全すべきと考えられる棚田として、『日本の棚田百選』に選ばれた4箇所（加美町岩座神（いさりがみ）、佐用町乙大木谷、村岡町西ヶ岡、美方町うへ山）を含めた126集落を「棚田保全地域」として指定し、集落の棚田保全推進活動への助成や簡易な基盤整備等の支援策を実施してきました。また、その一環として、農山村だけでは守ることが難しくなっている棚田の保全活動を支援するため、平成9年度から都市



写真1

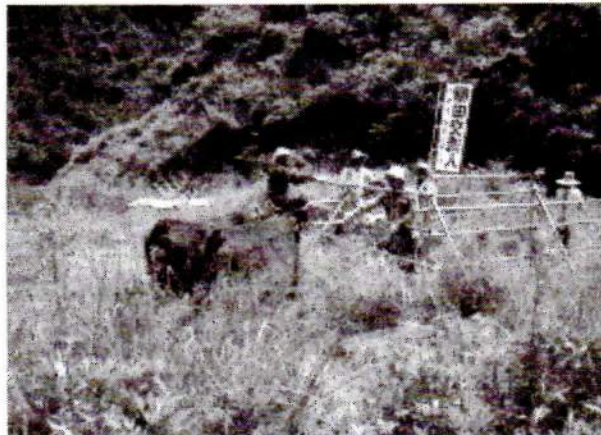


写真2

住民のボランティア「棚田交流人」の育成を進めており、平成 18 年度までの 10 年間で 1,000 人の登録を目指しています。

この取り組みは、都市住民が棚田における農作業を体験し、地域住民と交流することによって、棚田保全の重要性や大変さを理解していただくとともに、応援の輪を広げていこうというもので、(社)兵庫みどり公社に委託し、棚田交流人の募集・研修・登録や現地での交流会を実施しています。

すでに、阪神間を中心とした 600 人余りの棚田交流人が、県下の 18 集落の棚田で農作業や草刈に汗を流すとともに、地元の人との交流を深めています。

(写真 1)

[官庁ニュース]

「第 3 回世界水フォーラム」について

農林水産省農村振興局土地改良企画課 馬場 範雪

I. はじめに

世界水フォーラムは 3 年ごとに開催されています。1997 年 3 月に第 1 回フォーラムがモロッコのマラケシュで開催され、第 2 回フォーラムは 2000 年 3 月にオランダのハーグで開催されました。そして今回の第 3 回フォーラムが滋賀・京都・大阪で開催されました。水はいのちです。水問題は分野横断的な課題であり、182 の国及び地域からの海外からの参加も含み約 24,000 人の参加を得て、水に関わるあらゆる分野の国の代表や専門家が集まり様々な角度から議論が行われました。

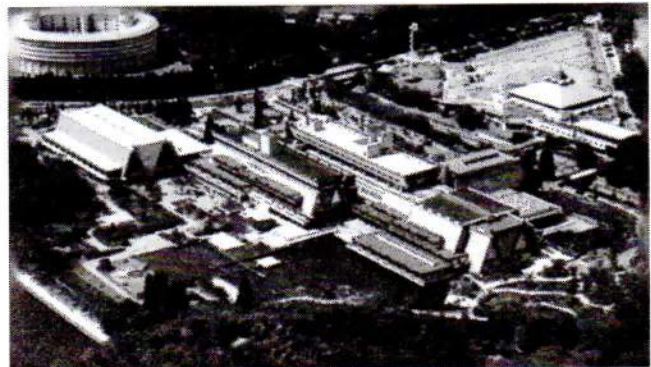
II. 農業と水の課題

20 世紀の驚異的な経済発展と人口増加に伴い、水需要は 20 世紀初頭に比べ 6 倍になるなど加速度的に増大しています。利用可能な淡水資源は地球全体の水のわずか 0.008% であり、このまま推移すれば 2050 年までに 30 億人が住む 52 カ国が慢性的な水不足に陥ると予測されます。その中で農業は最大の水利用者であり、世界の水利用の約 70% を占めています。

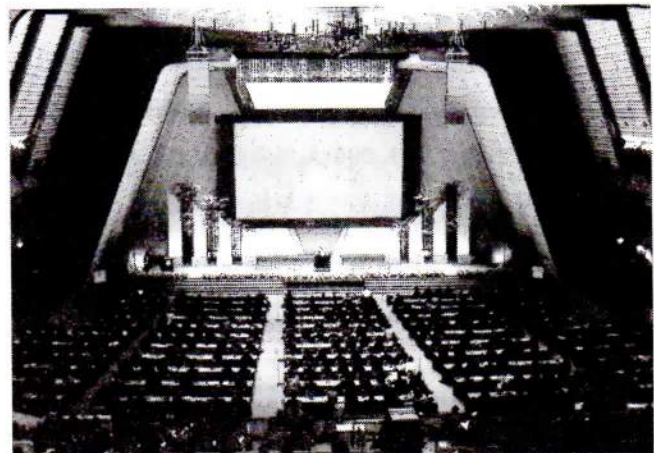
アラブ海の縮小やオーストラリアの農地塩害化など、農業による過度の水利用が水資源枯渇化の一因となっている例も世界各地で見受けられ問題となっ

特に、日高町の八代集落においては、平成 13 年度から、棚田交流人と地元の人たちが協力し、中山間地域等直接支払制度を活用しながら、耕作放棄されていた棚田 5.8ha の復旧に取り組んでおり、作業は草刈や農作業だけにとどまらず、草刈の手助けに和牛の放牧も行っていることから、放牧用電気柵の設置などもあり、14 年度は 40 回もの活動を行っています。(写真 2)

今年も、但馬の日高町 2 地区と村岡町、西播磨の佐用町で「棚田交流人」の募集を行っているところで、皆様方もぜひご参加いただければと思っております。



開催地：国立京都国際会館



開会式の模様

ています。

一方で日本やアジアの棚田に見られるように、農業と水の関わりにおいて地下水涵養や洪水防止、美しい景観や生き物の保全、伝統文化や日本人の精神の形成など多面的な機能を発揮しています。

しかし、世界の水議論は、このような水の多面的機能や地域の違いが評価されず、水の経済的な側面だけに目が向けられ、地域の特性を無視した経済原理に基づく水効率化の議論が展開されていました。

III. 水フォーラムでの積極的な関わり

このため、農林水産省は、この機会を捉えて、関係機関と協力して農業用水分野の関係者によるイニシアティブの発揮と、棚田も含むモンスーンアジア地域の水田かんがい農業に対する理解促進のために、以下に示すような積極的な関わりを図りました。

(1) 『水と食と農』大臣会議の開催

3月21日、FAOと共催で『水と食と農』大臣会議を開催し、50に及ぶ国と国際機関の約300名が参加しました。

この成果として、我が国の農林水産業施策の基本的枠組みである「いのち・循環・共生」に沿った、食料安全保障と貧困軽減、持続可能な水利用、パートナーシップに基づく大臣勧告文が採択され、この大臣勧告の主旨は閣僚級国際会議の閣僚宣言にも盛り込まれました。主な参加国・機関は、米、中、韓、印、タイ、マレーシア、フィリピン、カンボジア、ベトナム、インドネシア、ブラジル、仏、ギリシャ、ポーランド、トルコ、アフガニスタン、エジプト、シリア、南ア、ナイジェリア、セネガル、チリ、コロンビア、世銀、世界水会議、ADB、IWMI、CGIAR、UNEP等です。

(2) 「農業、食料と水」に関する各種セッション開催

国内外の農林水産関係団体によって14のセッションが開催され、約1,000人が参加しました。プレナリーに沢田敏男元京大総長を始め、イアン・ジョンソン世銀副総裁、ケイズールICID会長から基調講演が行われました。主なセッションと主催者は以下の通りです。

- ・「モンスーンアジア水社会の発展」（農業土木学会他）
- ・「農村の水が育む豊かな生態系と水質の保全」（農

村環境整備センター他）

- ・「アフリカにおける農業・食料・水」（緑資源公団他）

- ・「灌漑施設・用水の持続的・効率的利用と農民参加」（JICA他）

- ・「水管理組織の役割と農村地域における新たな水文化の創造」（水土里ネット）

(3) 「水と食と農」フェア開催

農林水産関係団体による「水と食と農フェア実行委員会」が組織され、「水土の命・国・星・守・知」をテーマに農業用水の歴史や食料生産に対する重要性、多面的な役割等をパネル展示や映像で紹介するなど多彩な催しが行われ、約3万人の入場者を数えました。会場：京都市「みやこめっせ」3月21日（金）～23日（日）



「水と食と農」大臣会議の様相



「水と食と農」フェアの様子

VI. おわりに

第3回世界水フォーラムでは、貧困と水全体の問題解決のためには、飲料水ばかりでなく農業用水も鍵というオランダのオレンジ公の発言に代表されるように、農業用水の重要性や多面的機能が注目されました。政府機関の取り組みだけでなく、多くの方々の努力と熱意によって農業と水の分野において多くのセッションやフェアが開催されたことがその原動

力となったと考えます。

世界的な水問題の解決に向けて、国際的な議論を深め、各地域における取り組みを認識し支援することはますます重要性を帯びていくと思われませんが、農林水産省では「国際コンソーシアム」構想を新たなステップとして各国に提案し、第3回世界水フォーラムにおいて発揮した我が国のイニシアティブを継続することに努力したいと考えています。

【日本の棚田百選紹介】

日本一（自称）の棚田

水俣市寒川地区の棚田は、棚田百選の中でも日本一と私が認定しました。その根拠は、（私が知る限り）日本で一番初めに「日本一」と私が言い始めたこと。さらに、私の家からの距離が「日本一」近いことです。日本一の棚田は、棚田の数だけあっていいのです。

石垣の修復を行う「石垣積み教室」を行うに当たっては、「世界3大石垣」に認定しました。（もちろん、私が認定したのです。他の二つはエジプトのピラミッドとインカ帝国のマチュピチュ遺跡。）自分で新聞のエッセイに書いた他、冗談のわかる人が雑誌の記事に書いてくれて、活字になりました。本年2月の教室では、1週間で40平方メートルの石垣を積み上げました。

また、バリの音楽と踊りのグループを招聘して近所の神社で公演をした時は、バリとの共通点は棚田だ、と思い、「世界3大棚田認定記念イベント」にしました。これも私の認定です。他の二つはバリとバナウェ（フィリピン）ですが、かねてから尊敬している大学教授に「雲南の棚田は入らないのですか」とまじめに尋ねられて、申し訳なく思ったこともありました。

こういう立派な棚田ですから、何とか地元の人を少しでも応援したいと思い、棚田音楽祭（谷間で太鼓をたたいて上から聞く）・彼岸花鑑賞会などの入門イベント、大豆耕作団（お金を払った会員に大豆を送るトラスト制度）・種まきから胃袋までの体験

愛林館（熊本県水俣市） 沢畑 亨
教室などのもう少し深い関係を結ぶイベントを行っています。また、アルバイトの諸君は耕作放棄田の草刈りや竹刈りにずいぶん活躍してくれました。



棚田を巡る関心の裾野は随分広がったと思うので、今年からはもっと深く掘り下げる「グリーンセミナー」を始めました。棚田の保全には、棚田そのもの、棚田に引かれる水を育む森、棚田を耕す人が揃わないといけません。それら全体を学ぶ1泊2日の研修会です。そして、愛林館の棚田保全活動全体を「田援計画（でんえんプロジェクト）」と名付けています。「農地の公益的機能に対してお金を払うべき」という世論形成を図るための活動です。少しずつですが、確実に理解者は増えています。田援計画はまだまだ息長く続ける予定です。

〔お便りコーナー〕

2003

地球環境米米フォーラムに参加して思うこと

愛 明

皆様はじめまして。私は、平成 13 年 10 月に日本クラウンレコードより「愛明」という芸名で歌手デビューをさせていただきました。「あゝ千枚田～ふるさと遺産」という曲を歌わせて頂いております。この度山口県油谷町におきまして、2003 地球環境米米フォーラム in 北長門」に歌手として参加させて頂きました。平成 14 年 4 月には棚田学会の会員にもならさせて頂き、棚田の継承のお役に立ちたいと同時に、この歌を残していきたいと願っております。

フォーラムは、5 月 31 日～6 月 1 日に行われました。

世界 50 カ国の外交官やホストファミリー他約 1000 人の方が参加した大イベントとなりました。前日の台風の影響で足下が大変悪い中にもかかわらず、楽しそうに苗を植えてホストファミリーの方々と交流がはかられました。

私も油谷町の棚田（日本の棚田百選）には、今までに 4～5 回足を運ばさせて頂き、現地の人達と交流をさせて頂きました。日本人の貴重な文化財として、残していかなければならないと強く感じております。

今後も棚田学会の皆様と共に活動させて頂き、又、棚田を守る人達の応援歌として歌っていきたくと決意しております。



〔事務局からのお知らせ〕

第 5 回棚田学会大会のお知らせ

日時：平成 15 年 8 月 3 日（日）13:00～

場所：三越劇場（東京・日本橋三越本店 6 階）

●総会（13:00～14:00）

●基調講演（14:15～15:15）

『棚田から日本の未来が見える』

木村尚三郎（棚田学会会長/東京大学名誉教授）

●シンポジウム（15:30～17:30）

『市町村合併で棚田はどうなる』

・報告 牛島正美（全国町村会経済農林部長）

大草秀幸（佐賀県相知町長）

高橋彦芳（長野県栄村長）

・パネルディスカッション

コーディネーター（司会）

中島峰広（棚田学会副会長/早稲田大学教授）

パネラー／牛島正美・大草秀幸・高橋彦芳

●懇親会（18:00～20:00）

会場：不二の間（同 7 階）会費：5000 円

編集後記

今年も各地の棚田で、オーナーやボランティアの方々が田植えに参加した。都会と農村の垣根が低くなってきているそんな中、文化庁は文化的景観として保存してゆこうと、棚田をはじめ全国の農山漁村の 180 ヶ所を重要地域として一覧にまとめた。棚田地域に残る祭り、しきたり、技を今こそ地元自身が見つめ直す大事な時期だと私は思う。 H. T.